

山田俊著『金朝道家道教の諸相』

—金朝における道家道教研究の可能性への挑戦—

松 下 道 信

女真族國家・金における道家道教の諸相を取り扱った大部の著が登場した。著者は、既に『唐初道教思想史研究—『太玄真一本際經』の成立と思想—』（平樂寺書店、一九九九）、『宋代道家思想史研究』（汲古書院、二〇一二）の二冊の論著を持つ山田俊氏である。三冊目の論文集となる本書は、先行する二書が唐、宋を扱ったのに続き、時代的に連續する金を主題とする。

ただし、考察の対象は金朝の全てにわたるのではなく、比較的早期に限定され、全真教など、金朝に興った道教教團については基本的に取り上げられていない。その理

由としては、總序で「全真教等の「新道教」を中國道教史、或いは中國思想史上に正確に位置附けるためには、「新道教」發生以前の道家道教思想の状況をより具體的に把握しておく必要が有る」（一一—一二頁）ためだと述べられている。

金朝に勃興した新たな全真教などを「新道教」として取り上げるとは、先行する諸宗派との斷絶やその革新性を過度に強調することにつながりかねない危険性をはらむ。ややもすれば、こうした「新道教」の抱える問題にこれまで無自覺であった道教研究に對し、本書は「新

道教」以前の實態を説明することで、「新道教」をも含めた當時の道家道教の全體像に迫ろうとするものと言えよう。

ところで、金朝において中心的な位置を占める全真教等の「新道教」以外の道家道教研究を進めようとする文献資料の少なさが問題となる。そのため、本書ではこれを補うものとして石刻資料や地方志を用いることで、金朝道家道教の歴史性と地域性両面の分析を行おうとする。目次は、次のとおり。

總序 金朝道家道教研究の總括と再考

第一篇 注釋資料から見る金朝道家道教

第一章 『道德經』『陰符經』注釋總論

第二章 時雍『道德眞經全解』の思想に就いて

第三章 金朝『道德經』注釋資料としての李霖

『道德眞經取善集』に就いて

第四章 李霖『道德眞經取善集』の思想に就いて

第五章 寇才質『道德眞經四子古道集解』に就いて

第六章 唐淳『黃帝陰符經注』の思想と道教思想史上の位置に就いて

第七章 劉處玄思想再考——『黃帝陰符經注』を中心に——

第八章 侯善淵の思想に就いて

第九章 趙秉文『道德眞經集解』に就いて

補論一 金朝道教「眞元派」再考

補論二 『淵源道妙洞眞繼篇』の文獻問題とその内容に就いて

補論三 李畋『道德眞經疏』小考

第一篇 總括

第二篇 金朝道家道教と地域問題

第一章 金朝道教地方志・石刻資料と文獻資料概観

第二章

『太上玉華洞章拔亡度世昇仙妙經』と六十一卷本『度人經』——金朝皇統年間山西汾州地區の一事例——

第三章

喬辰「重立泰寧宮碑」・「太清觀記」に就いて

いて

第四章 張萬公「太虛觀碑」に就いて

第五章 明昌二年碑文「太上玄靈北斗本命延生經」に就いて

附 明昌二年「太上玄靈北斗本命延生經（碑文）」校本

第六章 『元始天尊說生天得道經』と「佛道圖文碑」「霍習墓幢」——宋金元三朝道教の歴史性と地域性問題——

第七章 『凝陽董真人遇仙記』に就いて

補論四 「元陽子」小考

補論五 「草衣子」小考

第二篇 總括

あとがき／人名・文獻名索引

以下、内容を簡単に確認しておく。

第一篇は、金人によると確認できるものに道德經と陰符經の注釋が多く残ることを指摘した上で、二經の注釋を主軸として金の道家道教思想を検討する。道德經注に

については、北宋のあり方に範が求められていたことや、徽宗注の重視や佛教的解釋の不在が指摘される。また、そうした中で「性命兼全」を説いた李霖、重玄を強調した趙秉文、「三道」により養生思想を説いた時雍、古學へと回歸しようとした寇才質といったそれぞれのあり方が示される。隨所に見られる兩宋、そして、更にはそれ以前の道德經注との關係への指摘は、前著で宋代の道德經注を丹念に追いかけてきた作者ならではの説得力を持つ。陰符經注については、唐淳『陰符經注』による内丹的解釋への轉換により、金では陰符經は養生・鍊丹文獻として受容されたとし、唐淳注の王重陽の鍊丹思想への積極的な影響等を指摘する。劉處玄注、そして、侯善淵の注も大きくはこの流れの中に位置附けられ、彼らの思想が検討される。

補論の扱いではあるが、補論一・二で取り上げられる、いわゆる真元派の存在の否定は本書の大きな成果の一つであろう。真元派は、Isabelle Robinet氏が“*école Zhenyuan*”という呼稱を用いたことに始まり、王卡氏に

より提唱されたもので、金から元にかけて成立したとされる道派である。これが事實ならば、眞元派は全眞教等と並ぶ「新道教」ということになるが、著者は『上方靈寶無極至道開化眞經』等からなる上方四經及び關連經典の検討により、眞元派の師承關係は元朝後半以降に案出されたと結論付け、従来の眞元派の議論に再考を迫る。

第二篇は、地方志や石刻資料を用いながら、金領内の各地において繼承維持されていた道家道教の傳統について検討する。例えば、陝西の華山や山東の蒙山などでは、全眞教が進出するまで北宋以來の當地の道教のネットワークが維持されており、その後に進出した全眞教はこうした地域信仰の「場」を有効活用し、活動據點としたと言う。全眞教により荒廢した道觀が復興されたことは、早くは陳銘珪『長春道教源流』にも散見され、また、『至元辯僞錄』が批判する、全眞教の廟觀・寺院の接收などとも關係して注意されてきたものではある。だが、評價すべきは、本書が關連資料から全眞教進出以前の地域信仰の「場」を描き出している點にこそあろう。その

他、『太上玉華洞章拔亡度世昇仙妙經』『太上玄靈北斗本命延生經』『元始天尊說生天得道經』といった、道德經・陰符經以外の經典について、資料に基づきながら詳細に當時の傳授や流通の状況を明らかにし、分析しているのも興味深い。補論四・五では、元陽子と草木子に關する傳承の混亂を整理する。

本書を讀了した後、次に我々が考えねばならないことの一つは、本書で得られた知見がもう一度「新道教」とどう關係するかという問題であらう。

例えば第一篇では、道德經を検討するにあたり、眞常や妙有などの各概念について丁寧な分析が行われている。他方、これらが全眞教文獻に散見される用語であることを考えれば、その思想的淵源や關係についてはより細やかに分析する餘地が出てきたと言えよう。また、李霖の修養說において鍊精などの作爲が否定されていることや、寇才質が導引などの術に對して否定的であるのは、全眞教とも共通する、當時の修養に對する風氣を窺うことができるように思われる。

第二篇で指摘される、それまでの道教のネットワークを取り込む形で全真教が拡大したであろうことは、疑いなくところであろう。となれば、金領において、そして後には舊南宋領においても全真教の勢力が拡大することを考えるとき、本書で指摘されるような従来の道教との具體的な接点については、今後、更に自覺的であつてもよいかもしれない。例えば、やや時代は下るが、一二四五年の「孟州王屋縣靈都觀給文」という碑文には、張志謹なる道士の弟子たちに對し、張が丘處機と僅かに接点があつたことをもつて彼らを全真教の門徒として認める事例が見られる（高橋文治『モンゴル時代道教文書の研究』汲古書院、一四九頁）。現實には、こうした様々な形で全真教は當時の各地の「道教」を包含していったのである。こうした事實の解明は、江南地域をも含む、全真教拡大の實態や、その思想的變容を解き明かすことにつながるに違いない。

全真教の拡大の問題と絡んで、第二篇第七章で取り上げられる、女真族の董凝陽もまた非常に興味深い存在で

あると思われる。陳垣がかつて「新道教」に注目した背後には、それらを開いたのが北宋の遺民、すなわち、漢族であることが前提とされていたからである。では、非漢族にとつて全真教とはいかなる存在であつたのであろうか。本書で考察されているとおり、董凝陽は全真教の祖師たちと直接の師授關係にないが、それでは彼が全真教と結び附けられる際、自身の出自については意識に上らなかつたのであろうか。全真教には第十七代掌教の完顔德明をはじめ、關係する文獻にはしばしば女真系・非漢族と思われる人名が見える。非漢族の全真教との關わりを調べることは、從來の「漢族のため」の全真教とは異なる全真教像を描き出す可能性を秘めよう。こうした問題は、「新道教」を含む、當時の道家道教の全體像の解明につながる、來るべき研究課題であらう。

本書は、七百頁を優に越える、正に大部の書である。

從來、全真教文獻を除けば、金朝の道家道教に關する資料は、寥々たるものと目されることが多かった。今回、こうした大きな成果が現れた背後には、著者の道德經注

をはじめとする精力的な調査に加え、竝々ならぬ資料發掘への努力があつたことは想像に難くない。だが、それと同時に、本書の厚みが示すと思えるのは、金朝道家道教研究が秘めるまだまだ大きな可能性と、そして、それが突き附ける我々への課題の多さである。今、本書を手に取り、評者は改めてその重みに震えている。

(A5版、七四三頁、二〇二二年二月、
汲古書院、一四〇〇〇圓(税別))